

MAYOR'S TALKS
市長 対談

公益社団法人 SL 災害ボランティアネットワーク・市原ネット 代表

ばんない みさこ
坂内 美佐子さん

TALK THEME

地域防災

災害対応の担い手となるボランティア「セーフティーリーダー（通称SL）」として、防災・減災の知識や技能を地域に還元する活動を続ける坂内さんと、地域防災をテーマに対談しました。



対談相手
坂内 美佐子



市原市長
小出 譲治

災害ボランティアという存在

坂内 私が防災に携わるきっかけとなったのは、昭和62年の千葉県東方沖地震。実家や友人宅が被災して、1カ月ほど被災地で片付けなどの活動をしました。当時は災害のボランティアはあまりいなかったのですが、それなら私がやってみようと思い、それ以来、知識や経験を積み重ねる努力を続けています。

防災を学んで、**自分が無事であれば、人を思いやる気持ちにもなれる**ということに気が付き、この活動をしてきて本当に良かったと感じています。

市長 実は、阪神・淡路大震災のとき、被災地支援に向かった経験があります。とにかく何かできないかとトラックに支援物資を積んで大阪まで行ったものの、その先へは行けず、現地の方に物資を託して帰ってきました。自分の思いだけで、行動して良かったのかとも思います。

坂内 きっと、それによって助かった方がいたはずですよ。私たちSLの活動は、阪神・淡路の教訓から生まれました。大規模災害の直後、行政の救援がまだ届かない期間に、応急災害活動を担う人材の必要性が痛感されたからです。

市長 災害時、これほど必要な存在はないですね。防災訓練などを通じて、**多くの人にその存在を知っていただきたい**と思っています。

いつ来るかわからないのが災害

市長 災害が無いと思われてきた千葉県が、令和元年の房総半島台風で甚大な被害を受けました。それでも、その恐

怖も防災意識も平時には薄れてきてしまいます。いざというとき行動できるよう訓練を継続する仕組みが必要だと感じます。

坂内 「まさか」という言葉を多くの被災地で聞いてきましたが、**いつ、どこに、どんな規模で襲ってくるのか分からない**のが災害。普段から、被害を最小限にとどめるための自助努力が大切です。

地域のつながりが大切

坂内 地域コミュニティの関係が深いほど、復興が早いということも、今までの経験で実感しました。普段から顔の見える関係を作っておくことで、困ったときに力を合わせることができます。

市長 市原市では、地域住民の方が自発的に作成する「地区防災計画」の推進に、いち早く取り組んできました。これは計画の「冊子」が必要なのではなく、**地域ぐるみで自分たちの住んでいるエリアのリスクを知り、対策を考えるという「行動」が重要**なのだと考えています。

坂内 おっしゃるとおりですね。現にハザードマップを参考にした講座や研修、体験後には、皆さん改めて居住区のリスクを我が事として捉え、真剣に減災に取り組んでいらっしゃるようです。

防災における男女共同参画

坂内 地域防災に男女両方の視点で意見を出し合うため、**企画の段階から女性に加わってほしい**。それが「参加」ではない「参画」なのだと思います。特に、避難所運営に女性を入れていただきたいです。要配慮者への対応など、女性のきめ

細かい気遣いが生かされます。

市長 私も本当にそう思います。意思決定の場への女性の参画については、改革半ばのところはありますが、一歩ずつ課題の解決に取り組んでいます。

ステイホームを防災のきっかけに

坂内 「自助・共助・公助」という言葉をよく聞くとと思いますが、私は、「自助なくして共助なし」を座右の銘にしています。まず自分、それから家族が無事であれば、地域での共助もできません。

家族構成や生活環境によって、災害時に必要な対応は全く違います。家で過ごす時間の長い今だからこそ、**災害時をイメージしてご家族に必要な事柄を話し合い、命を守る対策をぜひ実践して**いただきたいと思います。

対談を終えて

市長 行政の救援が届くまで、どうしても時間が必要です。「自助」、地域での「共助」の大切さを改めて教えていただきました。災害ボランティアの方々を力強いパートナーとして連携し、市の責務である「公助」に全力で取り組んでいきます。

